佐倉市歴史探訪シリーズ　其の一

千葉一族盛衰記

佐倉にもあった戦国武将の居城

けやき家こもん 著

はじめに

『佐倉市の城』といえば、歴史民俗博物館のある城址公園をまっさきに思い浮かべられる方が多いのではないかと思います。

もちろん、鹿島川を望む高台にあった佐倉城は、江戸幕府の重鎮たちが治める佐倉藩の城として、重要な役割を果たしたことは論を待ちません。

しかし、その佐倉城からほんの2キロメートルほど離れた場所に、戦国時代下総の地を治めていた千葉一族が居城を構えていたことは、意外に知られていないのではないでしょうか。

千葉氏といえば、桓武天皇の血を引く名族で、その最盛期には千葉県のほぼ全域と九州や東北の一部などにも所領を持つ大豪族として名を馳せた一族です。

本資料は、平安時代から戦国期終焉までの、古代から中世の時代に活躍した千葉一族を中心に、関東の歴史を概観していきます。

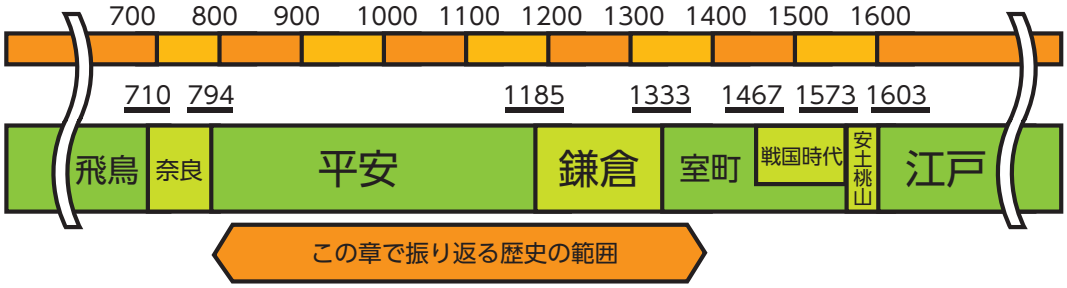
日本史の大きな流れを振り返りながら、千葉一族の人物にスポットをあて、極力わかりやすい言葉で話をすすめてまいります。

源頼朝や豊臣秀吉といった歴史上の有名人たちも登場させながら、入門中の入門書として楽しく読んでいただけるよう心掛けました。この資料をきっかけに、千葉一族について興味を持っていただければ、これに過ぎる喜びはありません。

本佐倉城跡から北を望む。　2014年1月撮影

第一章　千葉一族のなりたち

背景としての日本史①　平安時代から戦国時代の幕開けまで



千葉一族の話に入る前に、平安の幕開けから戦国時代の開始までの、いわゆる『佐倉千葉氏』成立前夜までの日本の歴史を、大きな流れの部分のみかいつまんでおさらいしたいと思います。

上の年表のとおり、７９４年に桓武天皇が都を平安京に定めました。これをもって、約４００年続く平安時代がはじまりました。

平安時代は、藤原家が権勢をふるう貴族中心の世の中ですが、その体制が徐々に崩れていきます。平安の中期から末期には、地方に散った貴族たちが武装化したいわゆる『武士団』が力を伸ばし、やがて中央の政権をおびやかすまでにいたります。

そしてついに１１８５年、源頼朝が鎌倉に幕府を樹立し、関東が政治の中心地となります。武士が政治の実権を握った鎌倉時代の幕開けです。

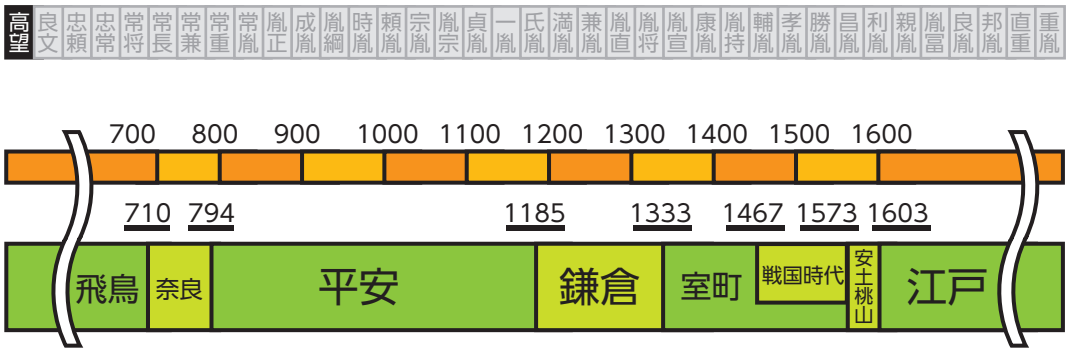
その鎌倉幕府も、やがて２度にわたる元寇や『御恩と御奉公』という鎌倉を支える土台となっていた考え方が制度疲労を起こし、１３３３年に足利尊氏に滅ぼされてしまいます。

紆余曲折の後、足利尊氏は京都に幕府を開きますが各地の豪族の寄り合い所帯という性質が強かった室町幕府は、その成立当初からほころびが目立ち、室町幕府単体で日本全国を統括する力は持ち合わせていませんでした。

さて次からは、このページで概観した歴史の中で、千葉一族の成立から佐倉に本拠地を移す直前までの歴史を、特に重要な時期に活躍した何人かの人物にスポットを当てながらみていきましょう。

高望王（たかもちおう）⬇平高望（たいらのたかもち）　839年から911年まで

千葉一族の始祖は桓武天皇の曾孫だった！



活躍した時代

千葉一族のはじまりを考えるには、平安京を作った桓武天皇にまでさかのぼる必要があります。

桓武天皇の曾孫（ひまご）の中に、高望王（たかもちおう）という人物がおりました。

おそらく、朝廷内でそれ相応の官位で仕事を得たかったのだと思われますが、中央の役職の数は限られておりましたから、それは容易ではありませんでした。そんな中、高望王は上総の地の地方長官に任命されたのです。この時、高望王は『平』という姓を賜り、『平高望（たいらのたかもち）』という名前で天皇の臣下になりました。皇族が臣民になることを臣籍降下（しんせきこうか）といいます。皇族から臣民になってまで手に入れた仕事ですから、彼の『本気度』をうかがい知ることができます。

そんなわけで平高望は、都からはるばる今の千葉県中部『上総』の地までやってきて、東国支配に力を注ぐことになりました。

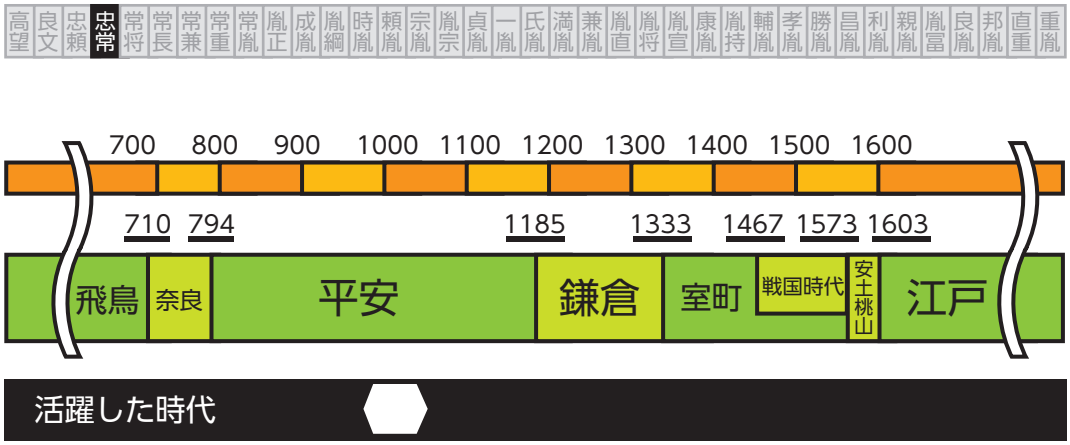
当時、まだまだ未開の地といわれていた東国の経営を、平高望は見事にこなしました。また、自分の息子たちを現地の豪族たちの娘と婚姻させることで、着実に関東に根を張っていくことになります。

ちなみに、この平高望を始祖とする一族が『桓武天皇の流れを汲む平氏』という意味で、『桓武平氏（かんむへいし）』と呼ばれます。桓武平氏の中には、有名な平将門（たいらのまさかど）の名もみられます。将門は、平高望の孫にあたる人物です。

また、平高望の子供に平良文（たいらのよしふみ）という人物がいます。この平良文の子孫が、後に千葉の姓を名乗ることになり、その系統を『桓武平氏良文流千葉氏』といいます。この良文流千葉氏が、上総、下総を中心に1590年の滅亡まで活躍した一族となります。

平忠常（たいらのただつね）　975年から1031年まで

荒ぶる忠常の後、一族は強力な武士団を形成した！



平安時代中期、国司との課税の収納をめぐる争いから、房総半島を焦土と化す『平忠常の乱』をおこした人物です。

この人物、なんと朝廷の出先機関である国府を襲撃し、国府の最上位の役職にあたる国司を焼き殺してしまうという凄まじい暴挙に出ます。その後も、平忠常は房総半島内を転戦し、行く先々で暴れまわりました。

忠常の乱は、忠常成敗のための追討使が変わるなど朝廷側の対応のまずさも手伝って数年続きました。しかし、最後には元々忠常の主筋にあたる源頼信という名の人物が鎮圧に乗り出したことで、ついに忠常は降伏することになります。忠常は、出家をして都に連行される途中病死したとされております。

この乱によって、房総半島は大変な被害を出しましたが、彼の息子たちが千葉の地を再建していく過程で、下総、上総、安房の強固な武士団が形成されていきます。

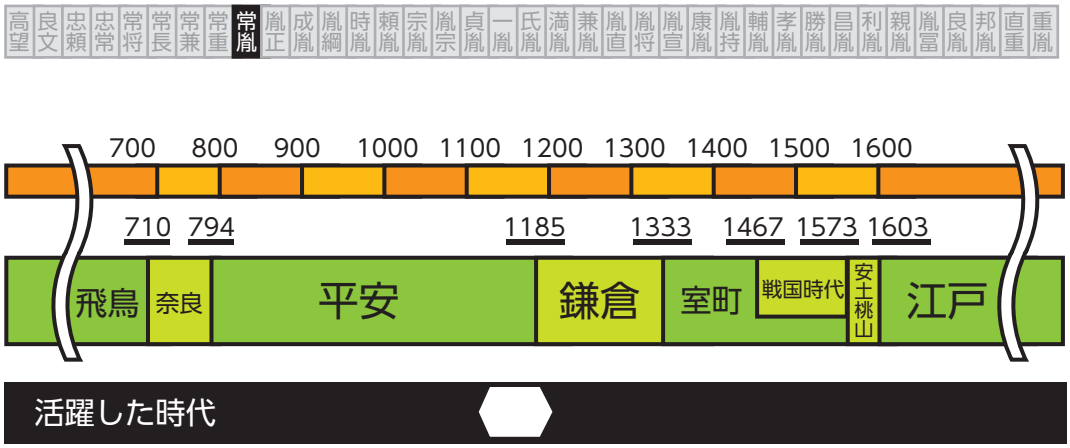
ちなみに、平忠常以降、この一族は名前に『常』の字を付けるようになったのです。

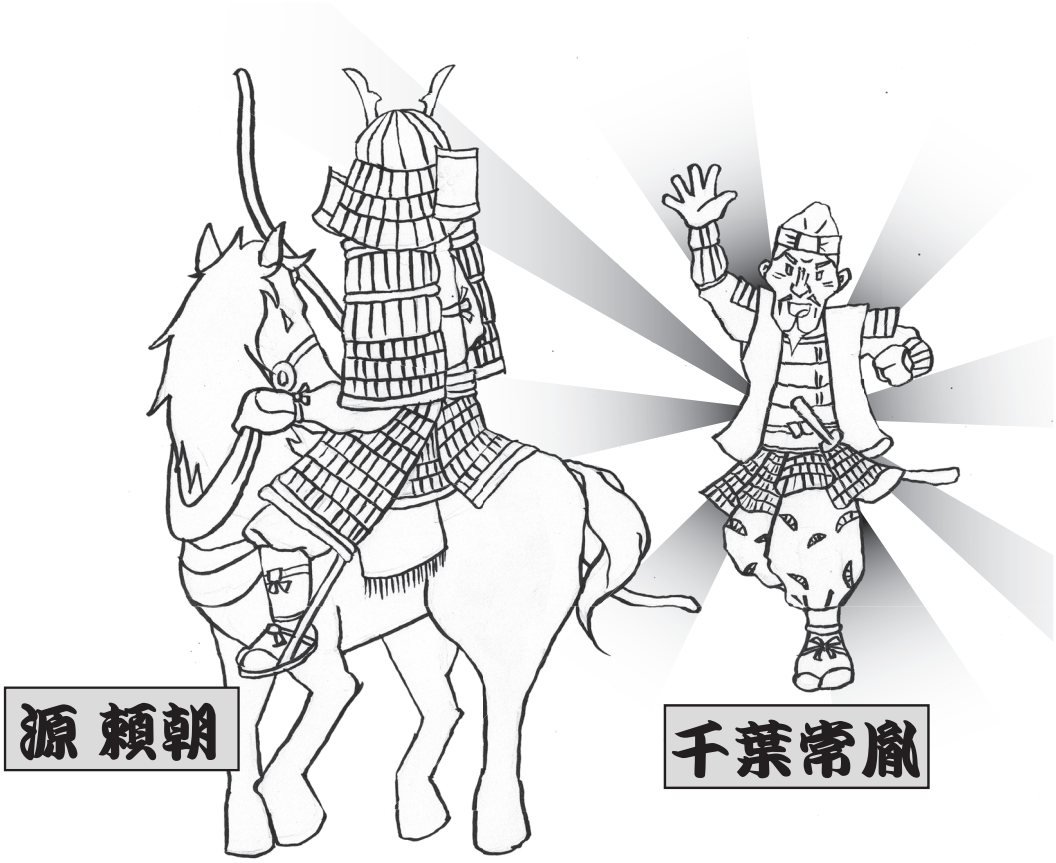
この乱で不思議なのは、乱を起こした忠常の息子たちが、乱の後もおとがめ無しで下総、上総、安房の地を支配し続けたという点です。また、忠常以降千葉一族の男子に『常』の字を付けることになったことも、本来彼の罪科を考えれば妙といえば妙な話です。おそらく、この乱のきっかけになった国司とのいざこざには、客観的にみてもある程度やむをえないような深い理由があったのかもしれません。

また忠常は、忠常の乱を起こす前に今の千葉市緑区土気に大椎城（おおじいじょう）という城を築城しました。この城は、その後千葉の一族が長く居城とした重要な戦略施設となります。

千葉常胤（つねたね）　1118年から1201年まで

スーパーヒーロー常胤は源頼朝の命の恩人だった！





平安時代末期から鎌倉幕府黎明期に活躍した人物です。常胤の時代に、千葉氏は最盛期を迎えることになります。

常胤の父常重（つねしげ）は、自分の姓をはじめて『千葉』と呼びならわすようになった最初の人物（注：これには諸説あり）といわれています。常重は、居城を大椎（現在の千葉市緑区土気）から千葉（現在の千葉市中央区亥鼻）に移し、この城が戦国時代の幕開けと共に戦火で焼失するまでの期間、千葉氏の居城となりました。

常胤は常重から家督を継ぐと、父の時代からひきずる荘園領主との所領地問題を乗り越えて、平安京の都で起きた保元の乱（ほうげんのらん・1156年）でも、源頼朝の父義朝（よしとも）の下で戦に参戦しま

した。

その後、中央ではいったん平清盛が権勢をふるう時代がきましたが、清盛の死後日本各地で平家打倒の機運が盛り上がりました。

そんな中、伊豆で逼塞していた源頼朝は、平家打倒の戦を開始します。しかし、伊豆の石橋山で戦に敗れた頼朝は、命からがら船で安房(現在の館山市)の地へ逃れます。その時、常胤は頼朝の元に真っ先に馳せ参じました。その後、頼朝旗下の武将として数々の戦を転戦した常胤は、頼朝から絶大な信頼を寄せられることになります。

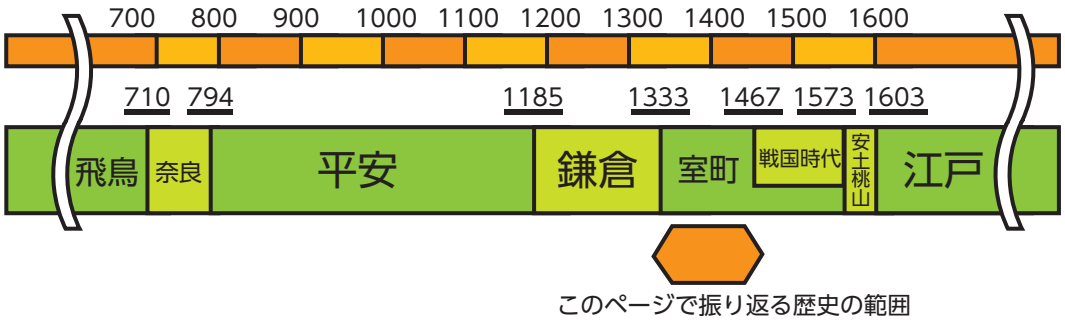
鎌倉幕府が成立すると、常胤はその活躍が認められ、上総下総をあわせた両総の他、佐賀や福岡の一部地域などを所領として安堵されます。

そのような状況を背景として、常胤以降、千葉一族は名前に『胤』の字を付けるようになったのです。また、常胤の息子たちは、常胤の時代に安堵された北下総の所領で繁栄し、千葉宗家の領国支配を助けました。主だった息子が六人いたことから、彼らをして、『千葉六党』といいます。

このように、常胤の時代に、千葉一族は日本各地に所領をもつ大豪族となります。しかし常胤亡き後、鎌倉幕府の実権は執権である北条家が握るようになり、頼朝時代から続く銘家は徐々に力を削がれていくことになります。

くわえて、鎌倉中期におきた宝治合戦（ほうちがっせん・1247年）では、千葉一族の一部（上総を治めていた千葉秀胤）が北条家に闘いを挑んだ豪族・三浦一族の側について戦ったため、秀胤を総領とする一族は三浦氏とともに滅ぼされました。

背景としての日本史②　室町時代から戦国時代の終焉まで



このページでは、鎌倉時代の終焉から室町に入り、戦国時代へと続く日本の歴史をおさらいします。

後醍醐天皇や足利尊氏らの活躍により、１３３３年に鎌倉時代が終りました。その後、後醍醐天皇が天皇中心の政治に戻すべく、いわゆる『建武の親政』を行いますが、この政治手法には、実際に鎌倉幕府を倒すために働いた武士階級も、多数の貴族も反発しました。結果、後醍醐天皇の建武政権がわずか３年で崩壊したあと、足利尊氏が室町幕府を打ち立てます。

室町幕府は、

・各地の実質的な支配権限を守護大名にまかせざるを得なかったこと。

・将軍家である足利家の経済基盤が盤石とはいえなかったこと。

などの理由により、その成立当初から政治基盤は安定しておりませんでした。

そのため、室町幕府の成立後も、幕府単体で日本全国を支配するまでの力を持つことができず、足利尊氏は関東経営のため鎌倉に鎌倉府という政治機関をおきます。

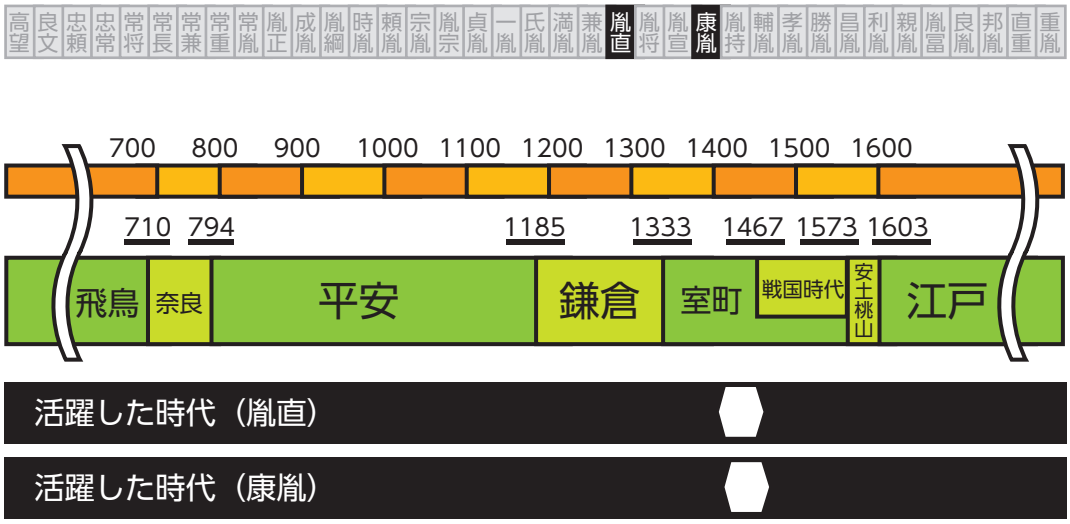
鎌倉府の長官には、自分の息子である足利基氏（あしかがもとうじ）を就任させ、その補佐兼お目付け役として執事（後の関東管領）を付けることにしました。執事は、代々上杉家が就任することになりました。

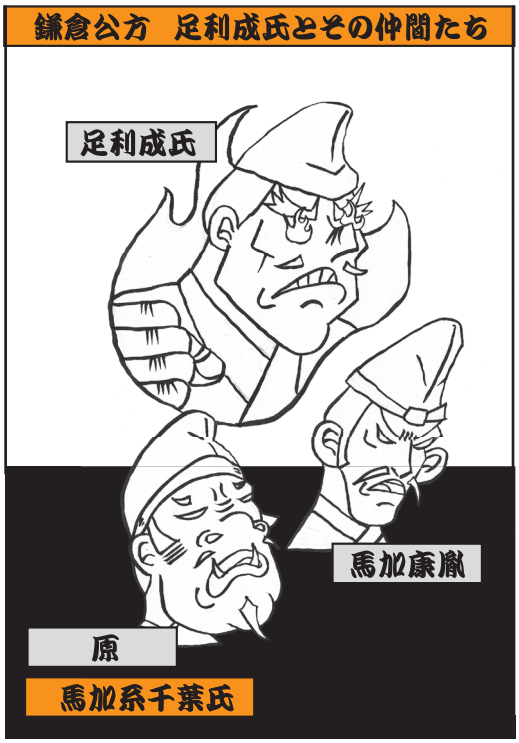
尊氏は、この地方長官である足利家と、関東管領職である上杉家に一定の緊張関係を持たせることで、関東に強すぎる勢力の発生を抑えようと考えたのです。しかし、足利と上杉の緊張関係は、やがて尊氏の思惑を超え、関東を内乱に向かわせる原因になりました。

そして、１４５４年、二つの家の争いは関東の諸将を巻き込んで享徳の乱という騒乱に発展してしまいます。このとき、千葉一族もこの時代の大きな渦の中で真っ二つに分裂してしまうのです。

千葉胤直（たねなお　1419年から1455年まで）VS馬加康胤（まくわりやすたね　生年不明から1456年まで）

鎌倉の内ゲバが千葉一族を分裂させた！





前章で見てきたとおり、室町時代に入ると、鎌倉府の中では鎌倉公方である足利家と、関東管領である上杉家の間で、絶え間ない小競り合いが続いていました。

1400年代には、足利と上杉の争いは双方が殺し合いを始める内乱の様相を呈してきます。関東で起きた内乱を鎮めるために幕府側も介入を開始しますが、完全に鎮圧するまでにはいきませんでした。

その後、鎌倉では何度かの内乱が発生し、ついに1454年、鎌倉公方足利成氏（あしかがしげうじ）が関東管領上杉憲忠（うえすぎのりただ）を暗殺するという事態が発生します。この事件をきっかけに始まる関東の騒乱を『享徳の乱（きょうとくのらん）』といい、これをもって関東での戦国時代の幕が切って落とされたとされています。

享徳の乱前夜の鎌倉府と千葉一族の対決構造は、イラストの通りとなります。

千葉の嫡流である胤直は関東管領の上杉を支持し、千葉の宿老であった原胤房（はらたねふさ）や、現在の幕張に城を持つ馬加康胤らは鎌倉公方である足利成氏（あしかがしげうじ）につきました。

さて、上杉憲忠暗殺の後、足利成氏は上杉方の武将を掃討するために関東各地を転戦しますが、その留守中に幕命を受けた今川氏に、鎌倉府を占拠されてしまいます。そのため、成氏はやむなく今の茨城県古河市にある古河城に動座しました。

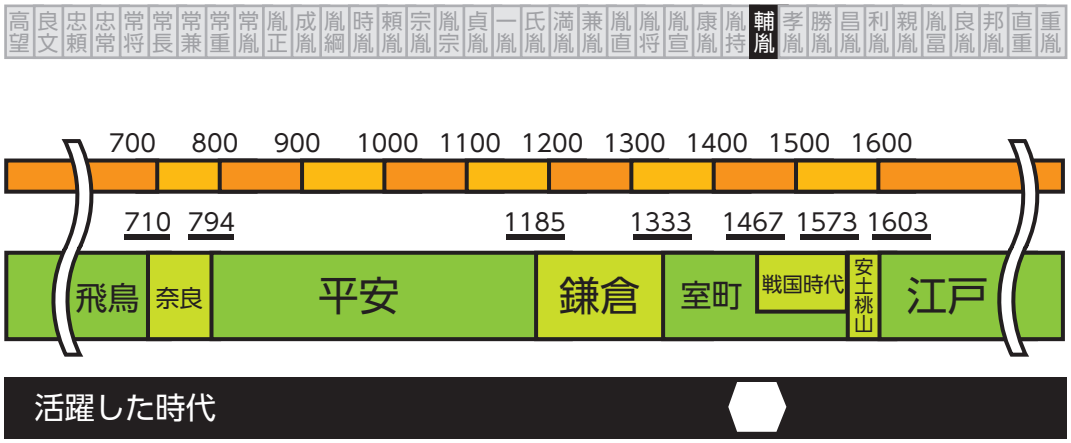
この混乱の中、千葉一族では、足利成氏を支持する原胤房が、対立する千葉本家である千葉胤直の居城千葉城（亥鼻城）に夜襲をかけるという事態（１４５５年）に発展します。胤直はいったん逃れましたが、原と馬加康胤の追討軍に追い詰められ、ついに千葉の嫡流は滅ぼされてしまいます。なお、このとき胤直の弟の二人の息子は武蔵の地に逃れます。この二人は、後に『武蔵千葉氏』として千葉本宗家奪還を画策しますが、馬加系の千葉氏の激しい抵抗にあい、ついに本家に返り咲くことはできませんでした。

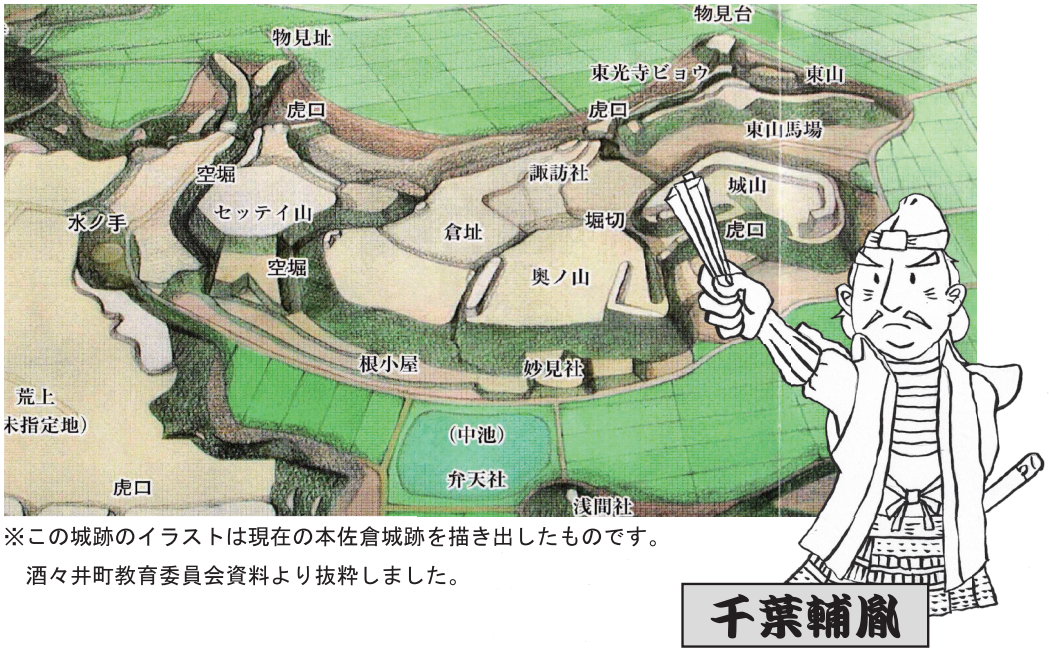
この後、馬加康胤は、自身を千葉本家として内外に触れ回りました。これ以降、下総の地を治める千葉本家は、馬加系の千葉氏が世襲していくことになります。

さて、このようにいったんは馬加康胤が勝ち残るかに思われましたが、この後幕府の追討軍に１４５６年に討たれてしまいます。享徳の乱発生からわずか一年間数ヶ月の、はかない栄華でした。

岩橋輔胤（いわはしすけたね）⬇（千葉輔胤）１４２１年から１４９２年まで

千葉氏、佐倉へ！





※この城跡のイラストは現在の本佐倉城跡を描き出したものです。
酒々井町教育委員会資料より抜粋しました。

千葉輔胤

馬加康胤が敗死すると、現在の酒々井町岩橋のあたりを本拠地としていた岩橋輔胤が大将となり、幕府の追討軍との闘いを続けます。この人物は、康胤の庶流の子とも、康胤の弟とも、康胤の養子ともいわれ出自は確定されていませんが、彼の元に康胤旗下の武将たちが集まったことから、馬加系の千葉一族と深いつながりがあったことは間違いありません。いずれにせよこの人物が、結果的に馬加康胤の後を継ぐことになったのです。

幕府の追討軍の大将が、都で発生した応仁の乱（１４６７年）の影響により京都に戻ったことで、岩橋輔胤は下総の地で千葉一族としての力を盛り返していきました。

現在の大佐倉にある『本佐倉城』は、この輔胤か、輔胤の息子である孝胤が１４８０年ごろに築城したといわれています（注：諸説あり）。

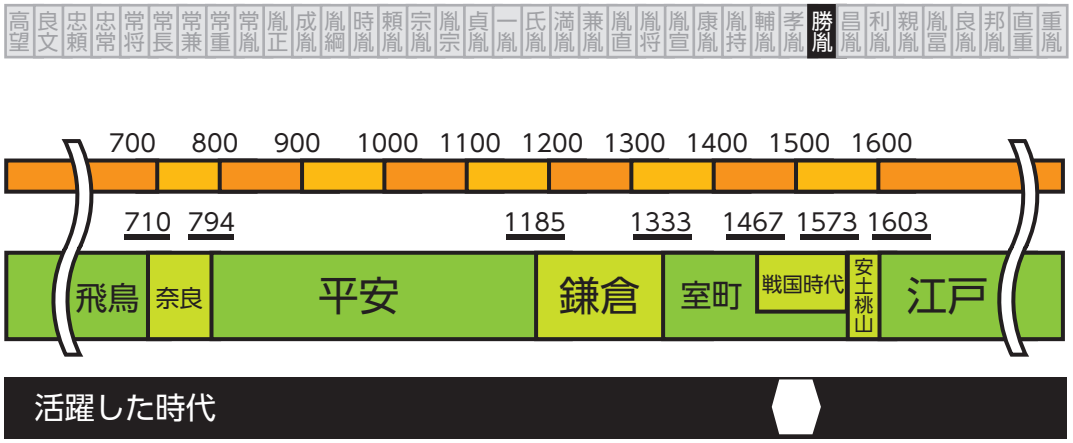
今、私たちが見ることができる本佐倉城の城跡の縄張りは、千葉一族が滅亡した当時の１５９０年当時の姿です。もちろん、城などの建物は一切残っていませんが、堀や土塁といった遺構はほぼ

完全な姿を残しています。
岩橋輔胤が築城した当初は、今見る様な高度に防衛に特化された姿にはなっておりませんでしたが、城の西側以外の三方を印旛沼の湿地帯に囲まれた高台は天然の要害でした。

輔胤が佐倉の地に城を築いた理由としては
・天然の要害であったこと。
・岩橋輔胤が本拠地としていた岩橋村が佐倉から近く、地の利があったこと。
・足利成氏が動座した古河城と、印旛沼を中心とする水路でつながっていたこと。
・千葉家の居城であった千葉城（亥鼻城）が戦火で焼かれてしまったこと。
・千葉城が交通の要衝地であったため、軍勢の移動が容易で、敵からも攻めやすい地勢であったこと。
などが上げられます。

千葉勝胤（かつたね）　1471年から1532年まで

文武に優れた武将勝胤と、後北条の長い手。



勝胤の父孝胤（のりたね）の時代にも、関東の情勢はめまぐるしく変わりました。足利成氏は上杉との度重なる戦によって徐々に勢力を失いつつあったため、上杉との和睦を模索しました。しかし、その和睦に反対した孝胤と成氏が反目し、千葉と足利の間に大きな溝ができてしまいました。

足利成氏の後ろ盾を無くした孝胤は、上杉や太田道灌に攻められ、一時は臼井城を失うなど、大きな危機を迎えます。

孝胤の後を継いだ勝胤は、その後も上杉との抗争を引継ぎ、何度か合戦に参加しています。しかし、勝胤の代になると、千葉一族が支えていた古河・足利家でも親子の間で内紛が起きて、もはや千葉一族周辺の武将同士の関係はからみあった糸のように複雑な様相を呈してきます。

また、上総の武将武田氏が下総にも勢力を伸ばして来たことから、勝胤の家臣筋にあたる原氏が武田氏との間で戦を開始します。この戦をきっかけに、勝胤は当時急速に勢力を伸ばし始めた北条家との同盟関係を深めていきました。この後、北条家が関東で絶大な力を持つようになると、千葉一族は徐々北条家に組み込まれていくことになるのです。

勝胤は、晩年禅宗に帰依し、本佐倉城の近くに『勝胤寺（しょういんじ）』を建立しました。勝胤寺は、現在でも曹洞宗の寺としてその姿を残しています。

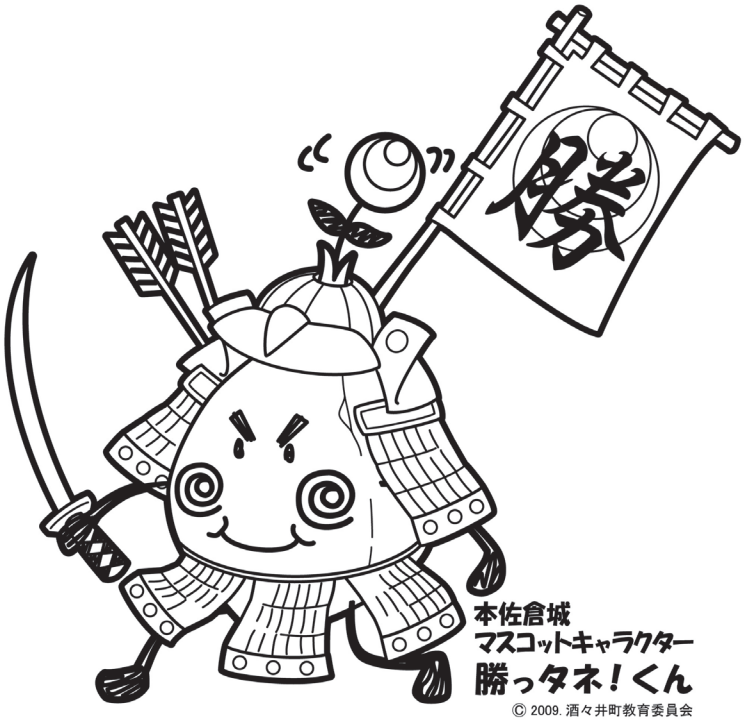
また、勝胤は詩歌に優れていたようで、1514年に私家集『雲玉和歌集（うんぎょくわかしゅう）』を編纂しました。この歌集の冒頭部分には

平のなにがしと申したてまつりて弓馬の家にすぐれ、威を八州にふるひ、諸道の達して政に両総にをさめ、なかにも大和歌にこころをよせて佐倉と申す地に幸草（さきくさ）のたねをまき給ふ。…（略）

とあり、この『平のなにがし』と書かれた

人物が、千葉勝胤をさしているといわれています。このように、文武両道の誉れ高い勝胤にちなみ、酒々井町では『勝っタネ！くん』というキャラクターを作りました。

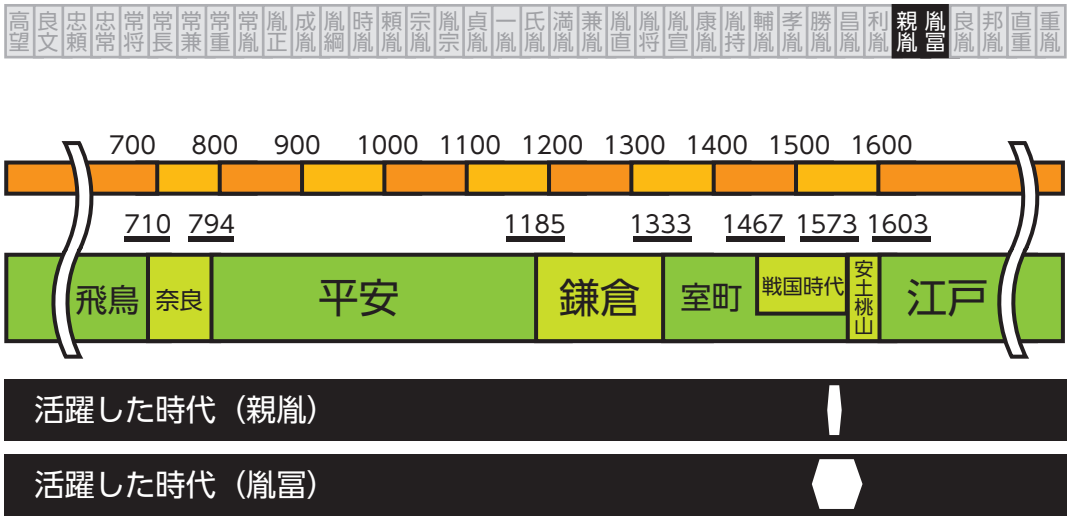
この歌集には勝胤の歌はないものの、東常縁（とうのつねより）、太田道灌（おおたどうかん）など、当時勝胤と敵対していた人物の歌などまで載せられています。



酒々井町の本佐倉城マスコットキャラクター『勝っタネ！くん』

千葉親胤（ちかたね　1541年から1557年まで）と千葉胤富（たねとみ・たねとむ　1527年から1579年まで）

暗殺と衰退。



千葉親胤（ちばちかたね）は、年若くして家督を継ぎますが、本佐倉城内にある妙見社で暗殺されたと伝えられています。享年17歳でした。暗殺の理由ははっきりしませんが、親胤が反北条の政策をとったことで、北条配下の武将の手にかかったとする説もあります。このころになると、千葉氏は関東で急速に勢力を伸ばし始めた北条家に、実質的に組み込まれてしまっていたようです。

親胤暗殺後、千葉宗家は親胤の兄にあたる千葉胤富（ちばたねとみ・たねとむ）が継ぎました。胤富は器量もあり、武将としても優れていた人物であったため、家来に慕われ、衰えつつあった千葉家の勢力を徐々に回復していきました。また、胤富は北条家に近い人物でもあったため、比較的安定した下総経営を行うことができたという見方もされています。

胤富が千葉の当主だったとき、古河公方足利家では跡継ぎ問題をめぐって内紛がおきていました。兄弟二人の跡継ぎ候補問題は、兄を推す北条氏康と、弟を推す上杉謙信が一歩も引かず、何度かの

小競り合いの後ついに合戦に発展します。

第二次国府台合戦と呼ばれるこの闘いには、上杉謙信の要請に応じた里見、太田連合軍と北条氏康との間で争われ、結果北条側の勝利に終わります。このとき、北条側の武将として闘いに参加した胤冨は、里見側に奪われていた小弓城や臼井城も奪い返しています。

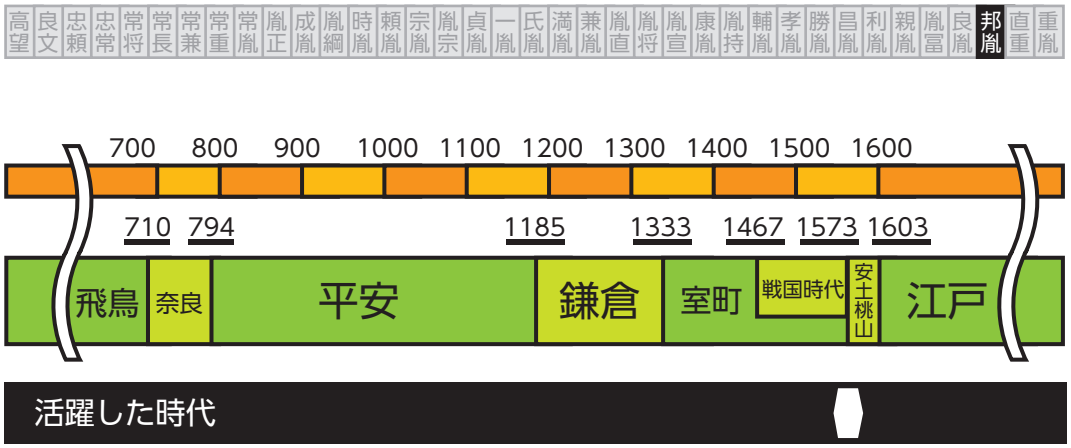
この国府台合戦で北条家が優位に立った情勢を見て、ついに上杉謙信は関東遠征を開始します。このとき、謙信は破竹の勢いで北関東を制圧しつつ、ついに本佐倉城から３キロメートルほどしか離れていない臼井城を包囲しました。

胤冨は、当時臼井城城主であった原氏に援軍を出します。この闘いでは、上杉軍の激しい攻城により、臼井城は堀一重を残し落城寸前まで追いつめられましたが何とか持ちこたえ、上杉軍の撃退に成功します。

しかし、打ち続く戦の中で、千葉一族は戦国末期に急速に衰退していくことになります。

千葉邦胤（くにたね　1557年から1583年まで）と千葉一族の滅亡

北条の直轄支配から秀吉の小田原征伐まで



胤富が五十代で亡くなると、邦胤（くにたね）は23歳で家督を継ぎました。一説には、邦胤には良胤という名の双子の兄弟がおり、胤富の後はいったん良胤が継いだとする説もありますが、事実関係を裏付ける資料に乏しいため、ここでは『胤富から邦胤』という説を採ります。

さて、邦胤は家督を継ぐと、北条氏政の娘と結婚し娘と息子を設けます。

そして、邦胤は家督を継いでから6年目の1585年、家臣である鍬田孫五郎（『本土寺過去帳』『千学集抜粋』。『千葉伝考記』では暗殺者の名は『桑田万五郎』とされる）に斬られ急死してしまいます。

邦胤の死については、病死として扱われている文献（『千葉大系図』など）もあれば、先に述べた家臣による暗殺説を採る文献もあり、はっきりしたことはわかりません。

邦胤の死後、千葉氏の家臣団は、家督相続について意見が割れました。

邦胤には、12歳になる娘と、3歳の息子がいたのですが、北条家からは娘に北条氏政の息子直重（なおしげ）を婿として迎えさせ、千葉の名跡を継がせるよう打診されていました。一方で、重臣の原親幹（ちかみき）は3歳の息子に後を継がせるべきだととなえたのです。

この千葉氏重臣の動揺をみて、当時北条家の当主だった北条氏直（うじなお）はついに出陣を決断します。目的は、千葉氏の跡目争いの終結であり、下総の地の北条による直接支配でした。

結果は、原親幹の降参と出家によりあっけなくつきました。これにより、邦胤の後継者は北条の意向どおり北条直重に決まったのです。

このとき、北条直重が下総を統治するための新しい城が、今の歴史民俗博物館のあるあたりに建てられたという文献もあります（『千学集抜粋』）。

この佐倉にできた新しい城は鹿島城（かしまじょう）と呼ばれ、直重が入城する前に姫となる邦胤の娘が移り住んだようです。この後、直重が鹿島城に入城したという記録はありません。この一連の騒動があったわずか５年後の１５９０年には、北条家は秀吉によって滅ぼされていますので、この５年間は千葉、北条両家とも混乱のさなかにあったといえるでしょう。

さて、このとき３歳だった邦胤の息子は、人質として小田原城に入りました。後に重胤（しげたね）と呼ばれることになるこの人物は、北条家滅亡を小田原で迎えることになります。

この、千葉一族にとって大きな節目となった年の翌年、豊臣秀吉は『関東惣無事令』を発布します。

これは、簡単にいえば「天下統一は秀吉の元になったので、これ以降は一切の戦争はしてはいけません」という命令です。

この命令に対して、北条家は関東の親北条の勢力に防衛体制を構築させ、来るべき秀吉との闘いに備えさせたのです。

関東の情勢は、こうして急激に緊張が増していきました。

１５９０年、北条側の惣無事令違反により、秀吉はついに小田原征伐に着手します。

秀吉は２１万の大軍であっという間に攻め上り、出陣後一ヶ月で小田原城を包囲します。迎え討つ北条は小田原城籠城を余儀なくされますが、あまりの戦力の差と、打ち続く支城陥落の知らせに戦意を喪失し、三ヶ月あまりの籠城戦の後、その年の６月に降伏します。

さて、小田原城の落城に先立つこと約一ヶ月、本佐倉城もひっそりと落城したと考えられています。籠城戦は行われず、城は粛々と明け渡されたことでしょう。落城のとき、城代としていた人物が誰であったのか、確たる記録はありません。これをもって、平高望の時代から考えると約８００年続いた千葉一族は、下総の武将としての歴史の幕を閉じました。

小田原城が陥落する一年前、小田原城に人質として囚われていた重胤のもとに、家康から『天下は秀吉の元に統一されました。重胤は北条と姻戚関係にあるけれども、こんな時勢を読んで、御家存続のために（城が落ちる前に降参するなどのことを）考えたほうがよいですよ』という趣旨の書状をたずさえた密使が送られてきたそうです。しかし、当時重胤とともに小田原城にいた千葉家重臣は皆北条家に近い人物であったため『重胤が幼く、また家臣の意見も一致しないので（降参は）見送ります』といって断ってしまったそうです。ここで、もし家康の誘いにのることができていたら、と考えないではありませんが、千葉邦胤の後千葉の名跡を継いだ人物が北条直重であったことを考えると、房総の名族である千葉一族は邦胤の代で静かに幕を閉じたともいえるかもしれません。

小田原陥落の後、家康の計らいで死罪を免れた重胤は、５１歳になるまで江戸で暮らし、ひっそりとその生涯を終えました。

あとがきにかえて

先にみてきたとおり、房総の地を本拠地として勢力を誇った千葉一族の歴史は、秀吉の小田原征伐をもって幕を閉じました。しかし、千葉の氏族は絶えることなくその後の日本を生き抜きました。

千葉の姓を継ぐ人物として有名なのは、幕末の剣豪にして北辰一刀流の開祖である千葉周作などの名があります。千葉氏ゆかりの人物としては、江戸時代に足かけ17年をかけて全国を測量し『大日本沿海輿地全図』を著した伊能忠敬も、千葉氏の庶流である大須賀氏の末裔です。そして何より驚いたのは、徳川幕府十二代将軍である徳川家慶の母が、千葉氏の血筋であったようです（以上、『千葉氏顕彰会』公式サイトより）。このように、一族の血脈は江戸期以降の歴史にも、しっかりと日本に根を張っていたことがわかります。そしてもちろん、現在でも多くの千葉氏の子孫の方々が各界で活躍されています。

毎年春、千葉氏顕彰会が主催する千葉一族の慰霊祭が行われます。この席では、千葉一族の先祖の霊はもちろん、東北を始めとする東日本大震災の被災者も合わせて供養され、福島県相馬地方復興のための寄付も行われているそうです。これは、本資料にも登場した千葉常胤の子孫が『奥州相馬氏』となって、現在の福島県相馬市を中心とする東北地方を本拠地にしたことからの縁によるものと聞いております。

震災後、『絆』という言葉を目にする機会が増えましたが、歴史を知る大きな意義の一つに、こういった『今に生きる』人間同士の結びつきを取り持つ効用も、あるように思います。

2014年1月吉日　著者

欅通信舎

発行元　欅通信舎

定価　￥300（税込）